近代文学における動物の「変容」の研究

Study of Transfiguration of Animals in the Mondern Literature

プロジェクト代表者：小川敏栄（教養学部・教授）
OGAWA Toshiei（Professor, Faculty of Liberal Arts）

１　研究の目的

近代文学において主人公は事件の展開とともに「変容」を遂げるが、人物のまわりの環境や動物もまた「変容」する。この「変容」は人物の「変容」と無関係ではない。「近代文学における動物の「変容」の研究」は、動物の「変容」の現れを文学作品において検証することにより、人物の「変容」との関係を明らかにしようとするものである。

２　研究の経過

平成１８年度の研究は２つの領域において行われた。

１つは日本近代文学における動物の「変容」についての研究である。これは、これまでの私の研究を、さらに一歩進めたものであり、その成果として、論文「猫の変容ーー夏目漱石の『吾輩は猫である』最終章を読む」を発表した。その後、小川未明の作品について研究している。

もう１つは、上記の研究を進めているうちに見出された課題で、動物と文学の関係を歴史的に究める作業である。それはもちろん日本に限ったものではなく、目を世界に向けて、しかも古代から辿ってゆかなければならない。広い意味での動物文学、すなわち動物の登場する文学について、その種類・特徴を整理するとともに、時代・文化との関係を歴史的に見ていくことにより、近代文学における動物と文学の関係の特徴、すなわち「変容」という現象の意味を明らかにしようとするものである。

この研究はとりあえずは概観の提示にならざるを得ないが、歴史的・ジャンル的な整理を行うことは大事な手続きであり、今後も研究を続けてゆく。

３　研究の成果

（１）発表論文

「猫の変容ーー夏目漱石の『吾輩は猫である』最終章を読む」、埼玉大学紀要(教養学部)第 42 巻（第 1 号）pp.1-6、平成 18 年 9 月（2006 年）

『吾輩は猫である』の猫（「吾輩」）は連載の１年半の間に変わった。人間の観察者であり批判者として登場した猫が、金田たちを攻撃する苦沙弥たちに批判者のお株を奪われ、単なる報告者にすぎなくなる。それは作品の語り手として選ばれた猫が、そ

の資格を失ったということであり、この特性の喪失が必然的に猫の死を招来した。本論文は、『吾輩は猫である』の最終章がこの猫の変容を明確に提示すべく書かれていることを論じた。

（２）発表予定論文
「かにの変容ーー小川未明『大きなかに』を読む」

『大きなかに』は小川未明の作品には珍しく、現実の世界に一つの謎が確固たる物質の形で残される童話である。

春の遅い、雪の深い北国での話が、子供の太郎の視点で語られる。

用事で３里ほど離れた海岸の村に朝早く出かけた太郎の祖父が、夜遅く、かにを背負って帰ってくる。かには大きさが尋常でないばかりでなく、翌日食べようとすると中身がすかすかであった。祖父は帰り道の浜辺で出会った男たちに、かにをもらったのだと言う。不思議に思った父は太郎を連れて、その男たちのことを尋ねて歩くが、誰も知らない。

このかには、まず、大きいということで特別な珍しい存在であった。それが、身がすかすかであるとわかることによって奇妙な無用の存在に変わるが、さらに、かにをくれたという男たちの存在が怪しくなった時点から、謎めいた存在に変容する。

本論文は、この変容のもつ意味を、太郎の成長と、祖父の老化の進行との関わりから論じた。

４　今後の課題

近代文学における動物の「変容」を体系的に整理するとともに、人物ではなく動物の「変容」を描くことの意味を、近代という時代との関連で解き明かしていく必要がある。

また、日本と西洋での動物についての考え方の相違が、上のことにどのように関わってくるか、宗教と倫理の相違が、いかに反映されるか、といった問題について、具体的な事例に基づき、考えていくことも肝要である。その際、明治期の御雇い外国人小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と江戸後期の僧良寛をとりあげて対比することは興味深い研究になると思われる。